



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

コスモポリタン教育における「愛国主義」の排除と
包摂の意味と課題：
ノディングスの「愛国主義」の両義性をてがかりに

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-08-24 キーワード (Ja): キーワード (En): Cosmopolitan Education, Noddings, Ambiguity of Patriotism, Ecological Cosmopolitanism, Caring 作成者: 小林, 建一 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2309/00173438 |

コスモポリタン教育における「愛国主義」の 排除と包摂の意味と課題

—ノディングズの「愛国主義」の両義性をてがかりに—

The Significance and Challenges Ahead from Exclusion and Inclusion of “Patriotism” in Cosmopolitan Education: On the Basis of Ambiguity of “Patriotism” in Noddings’ Theory

小林建一（秋田県立大学・非）

Kenichi KOBAYASI (Akita Prefectural University, Part Time)

<要約>

地球的な観点で考え、行動する市民を育む意義をもつコスモポリタン教育は、「愛国主義」教育との対立面が強調されてきた。しかし、ノディングズのように、「愛国主義」は両義性をもつと考えるならば、コスモポリタン教育においては、国民国家への忠誠が憎しみや敵意、莫大な生命と財産の犠牲をもたらす側面は排除されるが、外敵から国民と領土を守る側面は包摂されうる。ノディングズの提起する「エコロジカル・コスモポリタニズム」の概念は、コスモポリタニズムに愛国主義を包摂する道具として用いることができる。また、郷土を愛することを全人類の故郷を守ることへと同心円的に拡大したノディングズの「ケアリング」の考え方は、グローバル・シティズンシップの正当化につながる。このような視野に立つコスモポリタンの育成のためには、国民国家の現実在即して実効性のある営みとしての、地球とその市民を守るための地域にねざした教育などの実践が今後の課題となる。

*キーワード：コスモポリタン教育、ノディングズ、愛国主義の両義性、エコロジカル・コスモポリタニズム、ケアリング

はじめに

人類全体を一つの世界の市民とみなすコスモポリタニズム (cosmopolitanism) の思想にもとづいて、地球的な観点で考え、行動する世界市民を育む意義をもつコスモポリタン教育 (Cosmopolitan education) は、自分の国家への愛着と忠誠の心を育てる「愛国主義」教育、もしくは「愛国心」教育との対立面が強調されてきた。

ここでいう愛国主義と愛国心とは、ほとんど同義と見なされ、パトリオティズム (patriotism) ともいわれる。愛国とは、自己の属する国家への愛情を抱き、忠誠を誓い、献身の態度を示すことなどである。そして、愛国主義は愛国を一つの思想や立場としてとらえ、愛国心とは愛国を心理的な感情のレベルでとらえたものである。本研究においては、思想面に重点をおき、主に愛国主義という言葉を用いるが、心理的なレベルに着目して説明するときは、愛国心と表現することにする。

教育は、人間の形成や育成をはかることであるが、愛国主義教育 (patriotic education) がそのように国家への自己犠牲を求めるものであるならば、世界市民の育成をはかろうとするコスモポリタン教育との違いは決定的である。このため、相互に協力関係を築くとか、融合もしくは連携するという試みはなされなかった。それぞれが自己の優位性を主張し、いずれかを選択することによって、課題も解決するかのようなどらえ方がされてきたように思われる。とくに、近年、世界の諸国においては、ポピュリズムが台頭し、また民主主義の危機が叫ばれる中で、愛国を強調する排外主義的な国家主義の傾向さえ見られ、政治や行政の力によって愛国主義教育を推進しようとする動きも明らかとなっている。

このような中で、教育哲学者のノディングズ

(Noddings, 2012) は、愛国主義が両義性を有するものであることを提起した。それは、愛国主義がコスモポリタニズムから排除される側面と包摂される側面をもつというものである。ノディングズは、これを愛国主義の両義性 (ambiguity) と位置づけている。この点に注目するならば、コスモポリタニズムと愛国主義は相互に排他的関係にあることを絶対視する必要はなく、愛国主義をコスモポリタニズムの求めるグローバルなニーズへの貢献を受け入れるように方向づけることができるかもしれない。この意味では、ノディングズは、コスモポリタニズムと愛国主義の調和を試みたといえるのではないだろうか。

ノディングズ (2012) の「エコロジカル・コスモポリタニズム」 (ecological-cosmopolitanism) の概念は、そのために考え出されたものであろう。ノディングズ自身は、ヌสบウムら (Nussbaum al., 1996, 2002) によってアメリカで展開されたコスモポリタニズムと愛国主義の論争に与することはしてこなかった⁽¹⁾。だが、そのような概念の提起をみると、コスモポリタニズムの立場に立ちながら、愛国主義に親和的な姿勢を示したということが出来る。それは、教育の次元から考えると、郷土を愛することを全人類の故郷を守ることへと同心円的に拡大するコスモポリタンの育成を展望させるものである。

このように、コスモポリタン教育の推進の側に立つと考えられるノディングズが、愛国主義の両義性にもとづいてその排除と包摂を主張するのはいかなる根拠にもとづくのだろうか。本研究においては、根拠づけをするノディングズの論理構造を分析し、その意義を明らかにするとともに、今後とも愛国主義教育を推進する力が働くことが予想される中で、コスモポリタン教育が愛国主義と関わりながら、今後どのような課題を提起するかについて、考察することに

したい。

1 コスモポリタニズムと 愛国主義の対立と調和の可能性

コスモポリタニズムと愛国主義をごく単純化して説明するならば、次のようになるだろう。

コスモポリタニズム（世界市民主義）とは、全地球に近代的な諸国民国家を超えた唯一の国家、すなわち世界国家のみが存在し、コスモポリタン（世界市民）がその国家の運営を担うという考え方である。これに対して、愛国主義（パトリオティズム）とは、全地球に存在する多くの国民国家にそれぞれ帰属する国民が国家に忠誠を誓い、心理的レベルでは国家に愛着を感じることによって、国家が正当化され、その国家によって国民が外敵から守られるという考え方である。そして、唯一の権力をもった世界国家なるものは現存していない以上、コスモポリタニズムは非現実的な性格を免れない。むしろ現実的には、多数の国民国家が存在し、国際連合のような国家間組織を形成しつつ、対峙や競争、あるいは共存をしていることにかんがみると、愛国主義を強力に擁護する立場が存在することも理由のないことではない。

だとすれば、コスモポリタニズム-非現実と愛国主義-現実とに区別し、コスモポリタニズムを実現不可能な単なるアイデアとして排除することは、愛国主義の立場からは容易に行われる。また、コスモポリタニズムの立場から、世界国家を人類の究極的な達成課題とし、歴史的現実の国民国家や国家間組織を虚構とみなすようであれば、現実はすべて否定され、思考停止にさえ陥ってしまう。したがって、世界の平和が国家間の争いで脅かされている以上、コスモポリタニズムにもとづく教育を推進するにあたっては、国民国家への忠誠や愛着を求める愛国主義の問題をどのように理解し、関連づけるかが鍵になると思われる。そこで、まず愛国主

義がいかに正当化され、教育としても実施され、いかなる結果を招いているかを、次には、コスモポリタニズムとそれにもとづく教育の思想と実践において、愛国主義がどのように認識され扱われてきたのかを、それぞれ先行研究によって明らかにする。

(1) 愛国主義の光と影

市川（2011）は、「愛国心教育」の正当化の論理をまとめている。すなわち、世界国家が誕生する見込みはなく、それが必ずしも望ましい統治形態でもないで、人びとはいずれかの国民国家の一員として生き続けるほかないが、国民国家が存続するために多少の国民の愛国心が不可欠である以上、愛国心教育を求める主張が地球上から消滅することはありえない。しかし、愛国心教育は、個人の思想信条の自由を制約するものであるため、反対論との対立が避けられないが、いずれの立場も矛盾を抱えているとされる。

このように、世界国家の実現は絶望的であり、国民国家に代わる政治単位が存在せず、愛国心が外圧への反応としてあらわれることにかんがみると、国民国家とナショナリズムが消滅することはありえないとする。このため、愛国心教育は解決の目的が立たないまま、今後も存在し続けると予想する。

これをもって、愛国主義教育をめぐる多様な立場のいずれにも与せず、問題の本質に迫ったと評価できるかどうかは疑問である。たしかに、世界国家が存在せず、あるいはそこまで到達していない以上、国民国家によって守られている民主主義社会の市民として、戦争と同様に、愛国主義を論じ続けざるをえないというのは、現実の世界認識としてはまちがってはいないだろう。しかし、これはあまりにもリアリズムに依拠した見方ではないだろうか。世界国家の誕生が限りなく永遠に近い困難な課題だとしても、

生まれた人は必ず死ぬという現実性・真実性ほどではないのであり、現実の国民国家を絶対視する観点を超えない限り、愛国主義論争においては国民国家の擁護派に与するものである。

世界国家には至らないまでも、EU（欧州連合）のような地域連合の形成、国連を中心とした紛争解決あるいは戦争の予防、国境を超えた災害救助、国際的な NGO・NPO 活動に見られるように、国民国家の枠組みを超えた国家間の連携・協力は前進しつつある。世界国家の巨大な権力を憂慮しながらも、その実現に向けた歩みは続けられているのもたしかである。

このような方向に棹さすように、愛国主義教育への圧力はむしろ強化されつつあるように見える。わが国では、戦後ほどなく道徳教育が導入され、この中でつねに愛国主義教育のねらいを保持し続け、教育基本法の改定によって法的にも正当化し、道徳の教科化に至って、推進の土壤ができあがった。このような道徳教育に限らず、すでに学校教育全体においては「国旗掲揚・国歌斉唱」に象徴されるように、愛国心をもつことが強制されている。このような状況について、藤田（2008）は、戦前・戦後の愛国主義教育を跡付けたうえで、「内心の自由」を侵害し、民主的な市民性の形成に反するものと批判する。さらに、戦後のナショナリズムの多様性に着目しながら、愛国主義と民主主義の対立構造にメスを入れた小熊（2002）の観点では、わが国の愛国主義はつねにアメリカの民主主義との関係を意識せざるをえないものである。しかし、戦後、わが国が民主主義国家として再出発するにあたってモデルとなったはずのアメリカ合衆国においては、愛国主義が教育の面でも重視されている。

實際上、アメリカでは、愛国主義教育が露骨に行われているといってもよいかもしれない。ノディングズ（2012）は、子どもたちは「国旗に敬礼し忠誠の誓いを朗唱することは、長い

間アメリカの学校の授業日をスタートする方法として受け入れられてきた。……アメリカ国歌『星条旗』の言葉を学び、それを歌うようにさせられる。」と述べている。また、学校教育において「愛国心は、歌や詩、軍隊の英雄たちの物語によって、子どもたちに教え込まれている。」だけでなく、「学校の外でも、祝日は愛国心を強化し戦争を支えている。」たとえば、独立記念日は国家の誕生を祝う愛すべき日であるが、しかし、その日の催しは民衆が楽しみながら、戦争を祝い支える儀式と化しているという。このように、アメリカでは教育や地域の行事をとおして、子どもたちのほとんどは、高校に入学するまでには熱狂的な国家の市民になってしまうと、ノディングズは認識している。だすれば、子どもたちの育ちにこれほどまでに影響を与えるアメリカの愛国主義教育は、国家主義的で戦争や軍隊とも結びつけられていたということになる。

それでは、このような愛国主義は、それよりも崇高な全人類への愛とは何ら関係のないものであろうか。アメリカは、これまで世界に民主主義を広める活動にたずさわってきたとされる。これこそがまさに、全人類への愛と国家主義的な愛国心はいかに関わるのかの問題の手がかりとなる。

(2) コスモポリタニズムの愛国主義への挑戦

国民国家への忠誠や犠牲を求める愛国主義においても、正義と平等は理想と考えられている。しかし、これをよく追求するのは、コスモポリタニズムを担う「世界中の人類共同体に忠誠を誓う人、コスモポリタンの大変古い理想である。」（ヌスバウム、1996）といわれる。今日、コスモポリタニズムは、しばしば反アメリカ主義および反愛国主義と同一視されるが、必ずしもそのように断言することはできない。ヌスバウム（1996）がいうように、「ナショナリズム

と自民族中心主義の愛国主義は、……同類である。」しかし、たとえばインド人、ヒンズー教徒であるとともに世界市民であることができるように、国民的・種族的・宗教的なアイデンティティと同時に、世界市民としてのアイデンティティをもつコスモポリタンの道徳的特性を認めることができる。このような意味では、コスモポリタニズムは道徳的にも適切であるといえる。

それでもなお、このようなコスモポリタンといえども、戦時においては、極端に愛国的になる可能性が考えられる。もしも、狂信的な愛国主義が勝利したならば、コスモポリタニズムへの支持は反逆とさえ見なされるおそれがある。最悪のシナリオは、コスモポリタニズムの全人類の正義と平等を考慮せずに、敵国民を大量殺戮兵器で撲滅することもいとわないことである。コスモポリタニズムの理想が永久平和として実現するならば、そのような愛国主義がコスモポリタンを圧倒することはないはずであるが、国民国家が対立・競争し合っている現世界においては、戦時状況になる可能性はつねに存在する。その意味では、コスモポリタニズムの弱点をかいま見ることができる。

このような点として、バーバー (Barber, 1996) は、人びとはヌスバウムという全世界に住んではないだけでなく、ベトナム戦争やボスニア戦争などに見るような、アメリカにおけるコスモポリタンの広がりをもつ価値への傾倒は、コスモポリタニズムの病理のあらわれであると指摘する。しかし、人びとは世界の特定の場所に住んでいながら、人びとの愛着は狭いところにとどまらず外に向かって大きくなることができる。これは、コスモポリタニズム的な思考の帰結であり、アメリカが全世界的な価値の擁護者であるという思考とは異なる。ノディングズ (2012) は、後者をコスモポリタニズムというよりも、むしろ「帝国主義的」な傾

向と呼んでいる。

ヌスバウム (1996) のいうように、コスモポリタン、すなわち「世界市民になることは、しばしば孤独な営みである。」それだけに、個人的な無力の感情におそわれ、遠くで困窮している人びとを助けようとする願望が満たされないかもしれない。にもかかわらず、人類全体に関心を向けることへの信頼感は、戦争における徹底的な崩壊を防ぐかもしれない。このようなコスモポリタニズムの立場においては、愛国心や国家主義をまったく排除してしまうのではなく、それらに結びつけられた悪や弊害をいかに取り除くべきかの観点がクローズアップされる。

2 愛国主義のコスモポリタンの排除と包摂の論理構造

コスモポリタニズムと愛国主義の対立・分断は、どちらかの勝利によって解消されると考えられがちである。しかし、ノディングズが探求してきたように、それらは相互に歩みよることができないのだろうか。アメリカにおいては、愛国主義を拒絶せず、それが過剰な国家主義や排他主義に陥らないよう抑制することが試みられてきた。ノディングズ (2012) は、それを「抑えられた愛国心」(chastened patriotism) にもとづくものと位置づける。危険な過剰を避けた愛国心といいかえてもよい。すなわち、故郷への市民的な関心と愛着をもたらし、国家よりも政治的・道徳的なコミュニティ (共同体) の感覚を愛するような愛国心であるならば、それがナショナリズムに変化しない限りで容認できるとする。それでは、このような抑えられた愛国心は、どのようにして生み出されるのだろうか。

わが国では、子どもたちの愛国心教育を主に担っているのは、教科となった道德教育である。このように道德教育が推進されていないアメリカにおいては、愛国心に関わる教科として歴史

がある。しかし、アメリカの歴史教科書の記述を見る限りでは、抑えられた愛国心について考えたり、教えることに工夫を凝らしている部分を見つけることは困難である。

むしろ、アメリカの歴史教科書を多年にわたり研究してきたローウェン (Loewen, 2003) によれば、教科書はアメリカの「国民性に悪い影響をもたらしかねないことは一切省いている。……教科書はしばしば探究を促そうとする欲求と、むこうみずな愛国主義を教え込もうとする欲求という、相反する欲求がごちゃまぜになっている。」「ナショナリズムが犯人の一人である。」と断言する。つまり、教科書の最終的な目的は愛国主義の擁護であり、そのために歴史が歪曲されというわけである。そして、その原因を探った結果、教科書執筆者、出版社、教科書採択過程、教師と生徒、保護者、圧力団体、全体社会などの複雑な構造的なものであることを明らかにした (ローエン, 2003)。

ノディングズ (2012) も、このような教科書の執筆、出版、採択、学校での使用、さまざまな圧力団体の関与などのプロセスに注目し、分析検討を行っているが、やはりローエンと同じような所感を抱くに至っている。ノディングズもまた、愛国心を鼓吹する社会勢力による圧力の強さを痛感している。

このようなローエンとノディングズの記述を見ても、アメリカにおいては、愛国心を植え付けようとする圧力はかなり強力であることがうかがえる。それゆえ、歴史教科書によって抑えられた愛国心が育てられているという証拠は確認されていない。

そうすれば、抑えられた愛国心は具体的にどのようなプロセスを経て形成されるのであろうか。ノディングズの論理構造や説明を再検証するとともに、アメリカ社会への何らかの実証研究が必要かもしれない。現時点においては、抑えられた愛国心を、先述のノディングズの過

剰な危険を避けた愛国心、あるいはバーバー (1996) のいう、排除や回避をせずに安全性を与えられた愛国心ととらえておきたい。

そこで、以上のような抑えられた愛国心の概念をとおして、コスモポリタニズムと愛国主義は調和したといえるだろうか。仮に、双方が調和したという場合でも、不平等な包摂の関係にあるのか、あるいは対等な相互作用の関係にあるのかなど、関係構造の把握は容易なことではない。

ヌスバウムのとるコスモポリタニズムの立場は、愛国主義を排除するのであるから、国民国家の枠組みを明らかに超えようとするが、これに対し抑えられた愛国心は国民国家の枠組みを維持するものである。この点からまた、ノディングズの苦悩が始まる。

たしかに、ノディングズの基本的視点は、コスモポリタニズム的である。すなわち、ノディングズ (2012) は、「人間は、国民的、文化的な偏狭さを超えて行動しながら、多少なりとも進歩してきた。」という認識のもとに、人種差別の問題に取り組み一定程度は克服してきたし、また自然災害へのグローバルな思いやりや同情、共感にもとづく国境を越えた救援は、世界シティンシップを理解するための教育にとって重要なものと位置づける。しかし、そのような偏見の克服や共感が容易に憎しみに変わり、自国が人びとを敵視して、大量殺人を犯してしまう場合があるのはなぜなのかを熟考する必要を強調している。そのうえで、改めて愛国主義とコスモポリタニズムの調和を試み、①「世界における私たちの地位に対する関心」、②「伝統への誇り」、③「わが国の立脚する主義への誇り」、④「地域への愛着 (郷土愛)」の4つの領域について考察をしている。これらの領域は、コスモポリタニズムの観点から排除し、あるいは包摂できる境界を示そうとしたものと理解できる。つまり、ノディングズの言葉でいえば、愛国主

義は両義性を有し、それによって排除と包摂の双方が可能になる。次には、これらを整理し考察を加えることにする。

なおここで、ノディングズが国民国家について、どのような認識を示しているかを付記しておきたい。ノディングズ(2012)は、「私は、議論の場所としてアメリカ合衆国を用いた。」と述べている。このアメリカ合衆国は国民国家として州と連邦という構造をもつが、ノディングズの文脈全体からは、連邦としてのアメリカ合衆国を前提にしていることを読み取ることができる。それは、「米国歌『星条旗』」「U-S-A, U-S-A」「アメリカの建国」「アメリカの歴史教科書」「アメリカ合衆国は恵まれた国家」「キリスト教国としてのアメリカ合衆国」などの言葉を要所で用いていることから補完される。これに比べて、州と関連させた愛国の問題の議論は見あたらない。この背景を究明するとともに、議論の可能性について追究することは課題として残されている。

(1) コスモポリタニズムの理想と愛国主義の排除

愛国主義が国民国家を前提にしているのに対し、コスモポリタニズムの前提にするのが世界国家である。しかし、現実の世界においては、主権をもつ国民国家とそれらが結びついた国家連合、さらにそれらによる国際機関(国連)は存在するが、国民国家間の壁がまったく取り払われた単一の世界国家は存在せず、仮想にすぎない。だから、コスモポリタニズムを語ることは理想論であるが、世界国家は国民国家をもとに想定された国家といえるから、つねに現実の国民国家とどのように関りをもつかが問われる。たとえば、ノディングズ(2012)が愛国主義の両義性の一義としてあげた、愛国心と呼ばれる国民国家への忠誠が憎しみや敵意、莫大な生命と財産の犠牲をもたらす側面は、コスモポリ

タニズムの理想からは排除される。そのような忠誠は、他の社会を征服したり、攻撃に抵抗したりする場合に効果的であるが、国民国家間の争いを招くものだからである。

それでは、ノディングズがコスモポリタニズムと愛国主義の調和のために取り上げた①の「地位に対する関心」は、どのように位置づけられるのか。アメリカ国民は、たとえば軍事費や大学卒業者の比率、ヘルス・ケアなどにおいて、世界ナンバーワンであることにこだわっているため、その地位を保持することに苦しんでいる。たしかに、世界には、すべての市民が関心をもつべき地位に対する感覚が存在する。しかし、国民国家であるアメリカが世界ナンバーワンであることへの執着や、国家主義的な不寛容は、まちがった愛国心を促進するかもしれない。それでも、敵が心を生み出さず、甚大な生命・財産を危害することを回避できるなら、コスモポリタニズムの観点では、国家間のグローバルな共同体の善良な市民であることが名誉であり、関心をもつべきとしても、そのような執着や苦心を排除することにはならないだろう。

ところで、愛国主義教育においては、アメリカでも②の「伝統への誇り」が教えられる。この際には、偏見のない批判的な方法で行われることが肝要とされ、よく建国者の人物像が語られるが、理性の時代に生きた彼らのキリスト教的背景の有無を論じるというのが伝統であるとされる。また、憲法制定におけるキリスト教原理の影響が論議されても、建国者たちは宗教的な関心を克服できたと評価されるが、ノディングズは、これを③の「わが国の立脚する主義への誇り」と理解しているようである。

以上のアメリカにおける伝統と主義への誇りは、ほとんど連続していると考えられるが、ノディングズの文脈はあまり明確ではない。これらの伝統や主義への誇りは、他国を支配したり、攻撃するような国民国家への忠誠とは異なり、

愛国主義の肯定的側面を照らし出している。しかし、この場合においても、宗教的なあるいは国家主義的な愛国心へと強く傾倒するおそれがあるならば、それは排除されるべきであろう。それでもなお、明確な境界は設定できていないので、ノディングズの議論をさらに深めるのが課題となろう。このような課題解決のうえに、国民国家の枠組みにこだわる愛国主義を超えて、コスモポリタンの世界へと視野を開くことが可能となる。

(2) コスモポリタニズの非現実性と愛国主義の包摂

単一の世界国家は存在していないという意味では、その実現を理想とするコスモポリタニズムは非現実的である。しかし、ヌスパウム(1996b)が述べるように、「心からコスモポリタニズムに傾倒している者にとっては、世界国家が存在しないからといって、コスモポリタンとしての行動が妨げられるわけではない」。これは、コスモポリタニズムの道德論的な観点とあってよい。ジョーンズ(Jones, 1999)や柳澤(2004)のいう、道德意識としてのコスモポリタニズムである「道德的コスモポリタニズム」も、ほぼ同様の観点と見られる。世界国家の実現はコスモポリタニズムの究極の課題であり、道德的なレベルにとどまらず、政治的・制度的レベルにおける追究が必要となる。また、コスモポリタニズムと愛国主義の関係を見ていくならば、国民国家の問題を介在させる必要があるから、コスモポリタニズムの政治的・制度的レベルを視野に入れざるをえない。

このような観点に関わって、中村(2008)は規範理論的に、「各国家は、それぞれ人類にとって普遍的な道德的理想を追求すべきである。……人類にとって普遍的な理想を国家という限定された政治社会において共同で追求するならば、その共同の追求によって国民諸個人のあい

だに同じ国家に所属する集団の一員としての一体感と自覚が生まれてくる。またその共同の追求を立脚点にして愛国心も生まれてくる。このようにして生まれた愛国心は、人類愛を各国家において具体的に実現するものになっているはずである。」と述べる。現実の国民国家を前提にしながらも、人類愛を追求することにより愛国心が生まれ、この愛国心がまた人類愛を各国民国家において実現するという論理である。形式論理的な矛盾はなく、人類愛と愛国心の相互包摂関係をよくとらえていると思われる。

これに対し、ノディングズは愛国主義の両義性について考察し、コスモポリタニズムにとって愛国主義の排除される側面と包摂しうる側面を区分する方法をとる。ゆえに、うまく区分できないならば包摂できないことにならざるをえないが、区分できると包摂も容易である。コスモポリタニズムと愛国主義を調和させるとは、このような意味であろう。

このような調和の試みは、ノディングズの文脈においては、具体的にどのように展開されているのであろうか。ノディングズがあげたのは、④の「地域への愛着(郷土愛)」である。これは、「場所への愛着」として示され、健全な愛国心に貢献できるかどうかの問いではじまる(ノディングズ, 2012)。侵略や戦争の多くは、特別な場所をめぐる争いである。愛着のある場所の所有を奪うとか、その自然をゆがめるよそ者がいるときは、そのような外敵から守るために戦いに挑む。それだけ人間は場所への愛着が強く、これは普遍的なものかもしれない。

このように、場所への愛着は、政治的な抗争の原因であり、抗争は愛国的な戦いへとつながっていく可能性がある。愛国主義がこのような戦いを容認するのは必然的であるが、外敵から国民と領土を守る側面として、コスモポリタニズムに包摂されうる。なぜならば、コスモポリタニズムは現実的には国家や国家連合を含まざ

るをえず、理想的な単一の世界国家の実現の方向がまだ見えない以上、国民国家を前提にした愛国主義のそのような側面は擁護されなければ、国際正義にもとるということもできよう。歴史的に迫害と移動の経験をもつ民族のために新たな国民国家を建設することや、そのために母国を追われた民族の国民国家をどのようにすべきかの深刻な問題が解決できていない今日、場所への愛着は、コスモポリタニズムにとっては愛国主義の両義性の意味を明確にするにあたっての鍵となるものである。

以上のノディングズにおけるコスモポリタニズムの理想にもとづく愛国主義の排除と、コスモポリタニズムの非現実性にもとづく愛国主義の包摂という、それぞれの関係構造は、コスモポリタン教育においては愛国主義の排除も包摂も有意味であることの根拠となるものである。

ところが、理論的には、コスモポリタニズムにとっては愛国主義という概念や立場は存在しなくてもよく、愛国主義は仮構的な国家への愛着を強制するものにほかならない。しかし、ノディングズの理論は、コスモポリタニズムによる愛国主義の排除と包摂をとおして、政治的・制度的な現実態としての国民国家を否定も肯定もする。このことは、見方を変えると、現実的には愛国主義が完全に消え去ることがありえないため、これを逆手にとって、抑えられた愛国心の考え方に示されたように、概念的に愛国主義の両義性の帰結する他国への支配・攻撃を排除する一方、外敵からの国民・領土の防衛をコスモポリタニズムの中に包摂してしまうことを意味する。このような思考は、コスモポリタン教育の新たな課題を提起すると考えられるので、次に検討を加える。

3 新たなコスモポリタニズム概念と コスモポリタン教育の課題

ノディングズ（2012）は、「私たちが特別に

愛する場所の繁栄は、地球の健康と密接に結びついている。このように理解すると、私たちは抑えられた愛国心へとますます傾倒することになるだろう。私は、この場所を愛するから、それを持続させる健康な地球を望む。科学者が気候変動について見方を誤るならば、また、とくに、その変化に関する人間の行動の影響について誤ってしまうならば、私はなお予防手段を講じようとしなければならない。」と述べ、この方法について熟慮することを「エコロジカル・コスモポリタニズム」と呼んでいる。自分にとって特定の最愛の場所があり、それが福利に満ちたものであるとすれば、地球の福利のおかげなのであるから、他者の最愛の場所も福利で満たされるよう支援の手を差し伸べるのは当然であると、ノディングズは考える。これは要するに、全人類の生まれ故郷を守るために、コスモポリタンとしての行動が求められていることを意味する。結論は、これが実現することで、コスモポリタニズムは厚みが増し、力強いものになるということである。

このような提起は、教育学的にはコスモポリタン教育はもちろん、環境教育、さらにESD（持続可能性教育）の理論と実践にも生かされる。また、ノディングズの発想は、エコロジーの成果を反映しているが、それだけにコスモポリタン教育における愛国主義の排除と包摂という政治的・制度的側面を緩和し、当該教育の推進に対する抵抗感を取り除く作用が働くといえる。

この新たなコスモポリタニズムの概念が愛国主義の排除と包摂に関する論議に持ち込まれたのは、何も唐突なことではない。ノディングズ（2005a）は、すでに「グローバル・シティズンシップ教育」（Global Citizenship Education）⁽²⁾に関する考察において、次に要約するように提起していた。すなわち、どん欲と節度の欠如から地球環境を保護するための、教育の実践が教師の反省的・批判的思考をもとに促進

されなければならない、そのためには社会科での学習にとどまらない政治や歴史、文化、自然などについての多くの知識を必要とする。とくに、生態系に関する知識や生態学的な思考は一つの地域の生活が遠くの他者の生活や福祉に影響するという認識で、世界市民が絶滅寸前の種を守るために行動し、地球の環境保全に意を用いる必要がある。この意味においては、アメリカにおける植樹プログラムが注目される。

以上のような考察は、エコロジカル・コスモポリタニズムの概念を構成するにあたっての基礎になったものであろう。もはや、この概念の教育的な実践性は明白になったといえるのではないだろうか。

このように、エコロジカル・コスモポリタニズムの考え方は、生態系に対する理解を深め、貪欲を避けて節度ある生活を営むような、地球環境保全のための実践によって地球を保護することを世界市民の課題とするが、これは、抑えられた愛国心にもとづく思考や行動を要請するという隠喩を含んでいる。ゆえに、愛国主義の排除と包摂の側面を区分し、容易にコスモポリタニズムと愛国主義の調和をはかることができる。ここには、地球上の一つの地域の生活が遠くの他者の生活や福祉に影響するのであるから、ノディングズ(1984)が「ケアリング」の概念において示したように⁽³⁾、地域へのケアリングがグローバル・シティズンシップと結びつけられる地球へのケアリングにつながるという考え方が現れている。この地域から地球へのケアリングは、同心円的な関係にある。そして、このようなケアリングをとおした実践が、コスモポリタン教育においても不可欠な要素となるのである。

同心円的なケアリングの考え方に裏打ちされたエコロジカル・コスモポリタニズムは、コスモポリタン教育における実践について、きわめて現実に即してはいるが、地域を足場に地球全

体の理想を見すえた方法を提起することになる。ノディングズ(2005b)が考察した「地球とその市民を守るための地域にねざした教育」(Place-based Education to Preserve the Earth and Its People)は、その実践への期待を込めて具体化したものである。

このような教育は、榎本と猪口(2014)によれば、グローバリゼーションの進展にともない、人びとと特定の場所や地域、伝統、文化などが切り離され、地域社会や環境に無関心な人びとが増えたことから、「場」や「地域」にねざして行われるようになり、持続可能な社会づくりを促進させているという。それはつまり、「教育を通して特定の地域や社会、伝統とのつながりを回復する」もので、1970年代に潮流がはじまり今日に至っている。また、地域にねざした教育をリードしてきたといえる高野(2013)は、「Place」、「場」、「地域」について厳密な分析を行ったうえで、「地球のあらゆる事象が絡み合い、個々人もグローバルな枠の中で思考し、活動するようになった現代における、教育の根本的な問いの中にPBE(地域にねざした教育…筆者)の議論はあると言える。」と結論している。

このように、地域にねざした教育の姿が明らかになりつつある中で、ノディングズ(2005b)は、地域への人間的な関係について分析を加える。その結果、政治的・心理的側面(地域への心理的な愛着はいかに政治的な態度に影響を与えるのか)、環境的側面(一つの自然環境をいかに保護するかは、地球全体を保護することへのコミットメントに貢献するかもれない)、ローカル・シティズンシップとグローバル・シティズンシップの関係(教育的な戦略は、より広い世界に有用な知識と技術を開発するために、地域への愛をいかに利用することができるのか)、地域への愛と人間の繁栄(地域は個人生活においてどのような意味をもつことができる

か)の4つの側面を重視する。このような観点に立った教育実践は、今後のコスモポリタン教育の内容と方法の一つのあり方を示唆したものといえよう。

これに対して、今日の教育は、ポスト産業世界のどこでも効果的に役割を果たすことのできる若い市民を育成することを旨としている。しかし、そのような教育は、若い市民が育つ地域の価値を認めるために必要な知識を与えないのみならず、地球上のほかの地域の人びとの生活において、地域がどのような意味をもつかについての理解を与えることにも失敗するであろう。

そして、今日のグローバル・シティズンシップ教育においても、産業やグローバリゼーションの優先に対抗して、地域に目を向けさせることが、地球市民としてテロや格差、貧困、災害などのグローバルな課題へも適切に対処できると考えるようになってきている。それは、「グローバル」な教育を旨としており、「グローバルに考えローカルに行動する」市民の育成を課題としているからである。これを「グローバル教育」と称することができるだろうか。たしかに、「グローバル教育」を示唆する著作は存在するが、それはきわめて少数であり、論文も含めて先行研究は必ずしも十分ではない。このため、グローバル教育の概念はいまだ形成途上にあり、確立したものといえないであろう。

このような状況から、グローバル教育の概念規定は暫定的とならざるをえない。山脇(2004)は、「グローバルに考え、ローカルに行動せよ」という1990年代からNGOなどでうたわれた標語を哲学的に深めようとする「グローバル公共哲学」を構想する。ここでは、そのように考え行動する市民を育成するのがグローバル教育であると規定しておこう。そのためにも、人びとの公共的な活動がグローバルな視野の欠落した地域主義ではなく、文化横断的な価値理念をもち、多種多様な地域史と人類の正負の遺産

の入り混じった「グローバルヒストリー」の観点から、地球全体が直面している諸問題と積極的に取り組むことを課題とする必要がある(山脇, 2004)。

以上の検討から、地域にねざした教育とグローバル・シティズンシップ教育としてのグローバル教育は、相互に部分的には重なるが、同じものとはいえない。前者の場や地域を基盤にした教育は、あまり意図することなく、自然な形で地球的規模の課題解決につながる可能性に期待するものであるのに対して、後者は地球的課題への取り組みを意識しながら、各自の多様な現場において行動する力を発展させることをねらいとしている。ゆえに、今後、融合する部分が拡大する可能性は考えられる。

それでは、地域にねざした教育を唱えるノディングズのグローバル・シティズンシップ教育は、そのような融合とどう関わるのだろうか。ノディングズは、自己を基盤に同心円的に地球規模にまで関心や気づかいを拡大するケアリングという概念を媒介にしてグローバル・シティズンシップ教育を語るが、この概念によっては地域にねざす教育とグローバル教育のどちらも排除せずに包摂することができる。つまり、故郷という場や地域に愛着を抱く効果をもたらす地域にねざした教育のみならず、グローバルに考えローカルに行動する市民を育成するグローバル教育によっても、愛国主義のコスモポリタン教育に包摂しうる側面を明らかにすることができる。とすれば、コスモポリタン教育の今後の課題としては、双方の教育の完全な融合が望ましいことになるろう。

おわりに

以上のようなノディングズの理論によって、先述のヌスバウムらの愛国主義論争は終止符を打つことができたのであろうか。否である。国民国家はたしかに共同体として現実である。し

かし、国民国家の歴史は、全人類の歴史から見ると一時期のものである。さらに、全人類の歴史は、地球や宇宙の歴史のほんの一時期に過ぎない。このような点に気づくと、国民国家が絶対的な現実なのか幻想なのか、全人類の歴史も永續の可能性はあるのかなどと、誇大妄想的な思考に陥ってしまう。これを避ける意味でも、ノディングズによる愛国主義の概念の両義性はきわめてテクニカルではあるが、一定の意義を有する。それは、抑制的な愛国心の概念の創造によって可能になった。

しかし、このような概念では、コスモポリタン教育を喧伝するノディングズの自己矛盾をあらわすことになりはしないか。愛国心は、国家への心理的・情緒的な敬愛を指し、あくまでも自主的なものとして生まれ、たとえ抑制された状態とはいえ、意図的に教育されるにふさわしくはない。ましてや、国家権力により教育をとおして強制されるのでは、これまでもっとも避けなければならないとされた愛国主義教育と変わらないものになってしまう。

むしろ、コスモポリタン教育は、ノディングズのような現実の国民国家の政治や教育の実証的な把握をふまえ、かつ、これまでのコスモポリタニズムにおける単一の権力組織や世界国家の問題点を摘示しながら、国家概念にとらわれない地球秩序を構築する課題を追究し、その達成のための役割を担うべきであろう。

そのためにも、国民国家を超えて、一気に世界国家やその問題点を克服した地球秩序を目ざすコスモポリタンの意識を形成し地位を確立しようとするのではなく、そのようなグローバルな目標に向かってローカルに学習し実践する、気が遠くなるほどの忍耐強い教育としてのコスモポリタン教育こそが、厳しく冷酷な現実においては実効的なものとして求められていると考える。つまり、グローバル教育としてのコスモポリタン教育が自主的に実践されるのみならず、

国レベルのカリキュラムに位置づけられ、十分な条件整備のもとに実施されていくことを教育課題として提起し、締めくくりとする。

注

(1) このアメリカにおける論争は、1994年に「愛国主義かコスモポリタニズムか?」と題して『ボストン・レビュー』誌で行われた。「コスモポリタニズム」を対極に置くことによって「愛国主義」ないし「愛国心」の政治的・倫理的・教育的な意義を明らかにしよう、ヌスバウムを含め立場の異なる30人の識者が論争に参加した。提起された論点や問題は多岐にわたるが、議論が十分に深められていないという評価の一方で、「公共的討論」を豊にしたという評価もなされている(辰巳と能川, 2000)。

この論争は、ヌスバウムら(1996)によりまとめられて出版され、辰巳と能川(2000)が翻訳している。2002年には、ヌスバウム(2002)による序論(Cosmopolitan Emotions?)が追加され、サブタイトルが若干変更された改定版が出版された。

(2) 「グローバル・シティズンシップ」は、グローバル市民性として用いられることもあるが、世界市民性、地球市民性などと訳されることが多い。このような市民性を育成するのがグローバル・シティズンシップ教育といってよいだろう。これは、コスモポリタニズムの多くが世界国家や地球国家を展望し、そのような枠組みの中でコスモポリタン教育を考えがちであるのに対して、そのような国家を前提しないで考察される傾向が強い。このような差異については、なお議論の余地があると思うが、本論文では紙幅の関係からこれ以上追究せず、他の機会に譲りたい。

ここでは、ノディングズは、ケアの視点からグローバル・シティズンシップに関わる社会的・経済的正義や環境倫理、社会的・文化的多様性、平和の問題を提起し、教育という実践をとおして解決することに期待するが、当該教育に新たな一石を投じたものと評価できることを述べるにとどめたい。

(3) ケアリングは、狭義には「ケアする」人と「ケアされる人」との関係、つまり「ケアリング関係」として示されるが、広義ではそのような対人関係にとどまらない。ノディングズのケアリング概念は、自己をケアすること、対人関係を含む身近な人へのケアリング、見知らぬ人や遠く離れた他者へのケアリング、動物や植物や地球をケアすること、人工の世界をケアすること、理念のケアリングのすべてを含んでいる。しかも、ケアリング関係は、自己を中心に同心円状に拡大していくのが特徴である。

引用文献

Barber, Benjamin. 1996 *Constitutional Faith*, In Nussbaum, Martha C. with Respondents; edited by

- Cohen, Joshua. *For Love of Country?: Debating the Limits of Patriotism*. Boston: Beacon Press. pp. 33-34. p. 36.
- 藤田昌士 2008 学校教育と愛国心：戦前・戦後の「愛国心」教育の軌跡 学習の友社
- 榎本真美代・猪口綾奈 2014 グローバリゼーション下における地域に根ざした教育の可能性について：「場」とつながる PBE (Place Based Education) を参考に 立教 ESD ジャーナル第 2 号 pp. 22-25.
- 市川正午 2011 愛国心：国家・国民・教育をめぐる 学術出版会
- Jones, Charles. 1999 *Global Justice: Defending Cosmopolitanism*, New York: Oxford University Press.
- Loewen, James W. 1995 *Lies My Teacher Told Me: Everything Your American History Textbook Got Wrong*, New York: The New Press.
(富田虎男監訳 2003 先生が教えた嘘：アメリカの歴史教科書問題 明石書店)
- 中村清 2008 国家を越える公教育：世界市民教育の可能性 東洋館出版社
- Noddings, Nel. 1984 *Caring: A Feminine Approach to Ethics & Moral Education*. Berkeley: University of California.
(立山義康ら訳 1997 ケアリング：倫理と道徳の教育—女性の観点から 晃洋書房)
- Noddings, Nel. 2005a Global Citizenship: Promises and Problems. In Noddings, Nel (ed.) *Educating Citizens for Global Awareness*. New York: Teachers College, Columbia University. pp. 9-12.
- Noddings, Nel. 2005b Place-Based Education to Preserve the Earth and Its People. op. cit. *Educating Citizens for Global Awareness*. p. 57. pp. 57-68.
- Noddings, Nel. 2012 *Peace Education: How We Come to Love and Hate War*. New York: Cambridge University Press.
- Nussbaum, Martha C. with Respondents; edited by Cohen, Joshua. 1996 *For Love of Country?: Debating the Limits of Patriotism*. Boston: Beacon Press.
(辰巳伸知・能川元一訳 2000 国を愛するということ：愛国主義の限界をめぐる論争 人文書院)
- Nussbaum, Martha C. 1996a Patriotism and Cosmopolitanism. op. cit. *For Love of Country?: Debating the Limits of Patriotism*. P. 4. p. 5. P. 15.
- Nussbaum, Martha C. 1996b Responses, op. cit. *For Love of Country?: Debating the Limits of Patriotism*. p. 219.
- Nussbaum, Martha C. Edited by Cohen, Joshua. for Boston Review 2002 *For Love of Country?: In a New Democracy Forum on the Limits of Patriotism*. Boston: Beacon Press.
- 小熊英二 2002 〈民主〉と〈愛国〉：戦後日本のナショナリズムと公共性 新曜社
- 高野孝子 2013 地域に根ざした教育の概観と考察：環境教育と野外教育の接合領域として 日本環境教育学会 環境教育 VOL. 23-2 pp. 28-34.
- 柳澤有吾 2004 国家の枠組みは超えられるか：世界市民的公共性
安彦一恵・谷本光男(編) 公共性の哲学を学ぶ人のために 世界思想社 pp. 188-191.
- 山脇直司 2004 公共哲学とは何か 筑摩書房

The Significance and Challenges Ahead from Exclusion and
Inclusion of "Patriotism" in Cosmopolitan Education:
On the Basis of Ambiguity of "Patriotism" in Noddings' Theory

Kenichi KOBAYASI

(Akita Prefectural University, Part Time)

Cosmopolitan education which cultivates a citizen being able to think and act from a global perspective has opposed against patriotic education. Noddings says that the concept of patriotism is ambiguous. Cosmopolitan education excludes the sort of allegiance we call patriotism because of promoting hatred, enmity, and enormous sacrifices of life and property. It, however, includes defending the nation and territory from any foreign enemy. Noddings advanced the concept of "ecological-cosmopolitanism" in order to include patriotism in cosmopolitanism. Also, she justified global-citizenship by the idea of "caring", expanding love of place into preserving the home-places of all human beings with a concentric circle. The perspective of cultivating cosmopolitan needs practicing the place-based education of preserving Earth and global citizens, because the education is effective to match with the actuality of nation-state. The education etc. are challenges ahead.

Key Words : Cosmopolitan Education, Noddings, Ambiguity of Patriotism, Ecological-Cosmopolitanism, Caring